

まどろみに咳をする

泉空夜

マシナリーのまどろみが、とろりと轟いて、常闇が自ら滅びていく、明滅。まじないをまろやかに朗読する老婆は、渦の過多が夕空を嘘みたいに染め上げていく、明滅。の真ん中でナハハと笑う。

約束をそつと届けようとしたが、今日はうとうとと、当然のように、心臓が動く。

羅針盤が死んだのは、楽しかった過去をとうとうかき消して、機械を受け入れたからですか。

湾岸の岸辺の砂浜の、まだ生きるべき足跡が、わずかに湿り、理想のあなたの足の形を、一瞬間でもとどめているのが。

赤茶けた喉の、粘膜が、くまなく侵食され、蛆に躡り寄られ、しかし歌声の空蟬を、一細胞でもとどめているのが。

いみじくも、ふやけた視界の、清涼なる吐き気の、揺られた各駅停車の、連れられてきた祭囃子の、連れ添って歩いた通学路の、必ず忘れると知っている日々に染み込んでいく。

鬱蒼と。風。悪魔が笑うように、森が仄かにざわめく。老婆の微笑。雷が世界を裂き、鳥居が燃える。

延々と続く蒼い空を、教室にぼっかりと空いた窓から眺めていた。天井の高さと比べ、手を伸ばす口実は、くもが見ゆるだけ。

踊る時の足の、動かし方を真似て、水たまりに映った空色を、するりと長靴の作る波紋で繰り、そして広げ、昨日の大雨のあっけない残り香を探す人が、どこかにいる。

身体がララバイにひたさされて、空色に透き通っていく。

きつと、目を開いて。凍てつく輪郭が確実に硬さを刻み込み、が栗立つ。黒黒と黒子から太い一本の毛。掻き毟り、皮膚が破れ、爪に挟まった細胞、皮膚片、肉片、血の染みる、粟が、ぷつぷつと。

煙。粒子が肺の奥の群生して実った肺胞に引っかかり、眼球の上にもぷつぷつと斑点を作り、鼻の奥の花粉と結びつき、弾ける。

紺色の空が目染みて、星々のバラバラの散らばりを見て、満月が空に白い穴をきつぱりと貼り付けるのを知った。

ざっくりと、ひび割れた、あかぎれた、皿を洗う、水の冷たさ。

診断書がだんだんと、端より燃える赤いひだの侵食とともに煤へとちりちりと、じりじりと。

寸断された祭壇の木の切れ端が、しなだれるのなら、細く長い蠟燭の白いどろりとした伝い落ちる熱のねばつき。

セダンに乗っていた祖父のその笑みの見出せるセルロイド写真。白いとろりとした線香の煙の上昇。焼香。天井を越えて。

空を断罪するようにぎりぎり張られた電線が裁断する。

例えば、世界の終わり。

地球がごとく凍り、真っ白の輪郭が黒黒とした宇宙にはっきりと穴を浮かべ、あるいは宇宙全てが凍りつき始め、凍えた白いひだがちりちりと真空を侵食し、音のない真っ白の夜が訪れる。温度のない雪がゆらゆらと降り、都市を沈め、冷え切った世界。映画館に籠もり、古いSF映画が描き出す未来の2019年の白と黒の明滅、が観客の顔を照らす。

月が堕ちて、裏側に住む兎たちのひしめく住居のごつごつとした開口部が毛穴のように見える岩石。砕いて砂時計に詰め込むも、落ちることはない。

手が触れた男女が、あるいは手を触れ合った男女が、静寂の中、やがて、ミルクの白に染まった月の満ち欠けを語り、やがて、手を繋ぎ、やがてぎゅつと、曖昧に溶けて、そつと、笑い、ながら。白と黒の、スクリーンの中で。

問う。

何が空を覆うのか。プラネタリウムの偽物の囲われた空に映し出された、燃えて、さかる、彼岸花。

虹が透けて、レイリー散乱の青が、黒い宇宙を覆い、太陽の白い光が、とびとびの、光の波の、揺れる。

濡れた、私の足首より先。膝より下。下半身。ねばついた海水の、揺れる。ふらつきながら舌尖に感じたしょっぱさは、飛沫か涙か泪水か。空の青が海に溶けていくように、私の体液も海と混じり合っていていけるでしょうか。酔っ払いが口にした一夜限りの詩の言葉が、月の光に溶けていくでしょうか。

粘土から滲む油。洗い落とせないぬるぬるとした指先の、ささくれた、爪との境界に沈着した。フローリングに飛んだ油が足裏をぺたぺたと。でんぷんのりのたっぷりと指先ですくった、塗られてしわしわとふやけた紙。ぼこぼこ触れた指先の、一本一本の指の違いの、十本の区別できなさ。喉に触れた剃刀の冷ややかさ。

歯がぐらぐらと揺れて、沁みて、爪楊枝を歯と歯の隙間の歯肉に生け花のように突き刺し、泥団子をしゃくりと喰む。唾液が泥と混じり、じゃりじゃりと歯を研磨し、舌の上に錠剤のようにしょっぱい小石。水で吞み下す。引き裂かれた心臓がマルゲリータピザのチーズが伸びるように、肉片を滴らせながら赤黒く、ぼとぼとぼと、と。

風鈴の音。

ヘリコプターのバラバラと回る翼。近づき離れ、離れては近づき、バラバラと花束が風に揺れ、あたたかなさわやかな墓場。なかなか泣かなかった幼かった別れ。鮮やかな青空。姿の見えない鳥のピピピと啼く。

微笑み、母の頬に彫られた、あばたか、えくぼ。りんの透き通った金属音が、畳へと沁み入る。呼吸の静かな音。まばたきのこすれる音。静寂を割る、咳。マシンナリーのカチ・カチ・カチと、繰り返す、カチ・カチ・カチと、シャト

ルランの音階の低いドの響きが腹の奥に沁み、荒い呼吸の音。時計が切り刻む、カチ・カチ・カチと、耳鳴りのように消えることも広がることもなく、水滴がシンクを叩く、ぽつ・ぽつと。

見捨てられた地蔵の頭を穿つ雨垂れ。誰も訪れない静謐な診療所にかかる讚美歌。瓶詰めになった誤謬ばかりの歌詞。バラバラと、遠くで語る。

紫の花びらを押し潰し、腕の血管を上からそっと色付けて、浮かび上がる幾何学模様。まじないを小さく口にし、ひりひりと皮膚に染み込む。

目、くるめく、万華鏡の鏡を部屋中に敷き詰め、つぶつぶの宝石のような銀河、壁に寝そべって、重力を聴く。揺れるたびに世界の彩りは一変し、極彩色のタイムラプス。視神経がハープのように奏でられる。夕焼けの、レモンの、夏の入道雲の、生い茂る、蜜柑の、赤ワインの、ピンクの象の。

網膜に写る、昔話のような、童話のような、完璧な形の林檎をツルツルと、しゃくりと喰む。一色の赤から、黄色の果汁が弾けて、ぼとぼとぼと、とワイシャツを汚し。

やがて日は落ちゆき、夕日を浴びた街に、メランコリックな音楽があちこちから流れ、銘々が今日の終わりを告げようと競い合い、人々の耳に注ぎ込むと。

ゆらゆらと揺れる電線の影が、大縄跳びのように足元を掬う怪物の影となる。太く、細く、異形が街灯に照らされて落とした影のように。

夜の闇は電線を呑み、宇宙を呑み、明滅する街灯の、誘われた蛾の、頼りない羽ばたきの作る、風とも言えない空気のまどろみ。私の吐く息。

螺旋階段から見上げた火星の赤さ。バーコードのような柵に囲われて、ひんやりとした金属を掴み、牢獄を思い、スマホを取り落とさないように。混濁した、コンタクトレンズの、泥濘の。

理想のために死ぬのですと兵士がうそぶくのを聞いた。あれは夢の中だった

のだろうか。テレビの中だったのだろうか。ニュースかアニメか。聞き流されて、震える文字列の、ぼろぼろと崩れ落ちていく、金属の細い活字の、棚に収まった、ぼろぼろと落下した、喉の奥に引っかかった、言葉にならなかった、微笑みの、寂しさに嘆いて、ゆるやかななめらかな清廉さの中に還りたいと願っている。

留守の家のベランダに揺れる洗濯物。物干し竿にこびりついた水垢。下の名前を、本名を、ふと呼ばれる。夏空の下、あるいはダンスクラブのフロアの、人々の行き交う、流れの中洲にて。鈍い頭痛を晴らしてくれる肉食獣の唾液混じりの囁き。車道の向こう側の通行人。

列を成して、木漏れ日の下、少女たちは、バスを待つ。永劫の待ち時間をも、待ち続け得ると、けらけらと笑う、ふさわしい光景、計算された、打ち捨てられた、無遠慮。遊び疲れた、幼児の、寝息。すべての純粹さをミキサーにかけて、泡立つ罪、海の中に混じっていったはずの私の涙が、ブレードに絡め取られて、塩の結晶となり、砕かれることなく、歯車の隙間を埋め、ガ・ガ・ガと、ブレードの回転は止む。

蠟燭はついに短くなった鉛筆のように、ぐずぐずと溶け落ちて、ねばついた熱もさらさらとなり、炎は明滅するように息絶えようとする。パツキリと割れる、機会をも逃して、もはや全てを泥へと溶かしゆくしか仕方がないでしょうから。粘性があるから、魂をもスライムに浮く水晶のように。ただ滲み、歪み、ほがらかな、ささやかな、まどろみ、灰色の、筆洗いやバケツの中のマーブルの、明滅する瞬きの視界の、落ち落ちて、川のせせらぎの、ゆるやかな……。

わからない。

カットインした閃光。雷が空を裂く。咯血、鮮やかな赤に見放されて。

余分な愛はない。

騙されてもいいと。

伶俐な子供が言う。

そよ風が吹く、くると回ると回るかざぐるまに、くらくらと叫ぶあざけりに、湾曲したスプーンに反射した世界は凝縮し、あの日見た映画のたったワンシーンの、ワンフレーズの、俳優の頬の黒子の、古傷の凹凸の、カチ・カチ・カチと、数取機を押し続ける。夢中で、枯れた声で。尽くされた人生の亡骸を眺めて、そっと笑う。

眠りたかったら眠ってください。

名前も知らない老婆が優しく抱擁し、

ララバイが沁みるから。

無数の光の粒がキラキラと虹色になって、海になれなかった涙の代わりに視界を覆う。チカチカと。